

「未来の命を 守る人になる」



ついに言ふより友達との思い出



は、東日本大震災の津波で児童70人が死亡、4人が行方不明となり、教職員も10人が犠牲となる大惨事に見舞われた。直前まで校舎にいて生きてきたのは、わずか児童4人と教師1人。「自分が生きている意識をずっと考えていました」と、言葉的に助かった1人、只野哲也さん(16)は、母のじろこさん(当時41歳)、妹の未嫁さん(同9歳)、祖父の弘さん(同76歳)の家族3人を失う悲しみにも直面した。「亡くなつた友達にわやんと親告できるもつて、未来の命を守る人になる」決意は固い。

【石巻遭難部・百武昌春】



大川小で被災保存希望の只野哲也さん(16)

震災当時小学5年生だった只野さんは現在、石巻市内の県立高校1年生。強豪の県立高専に入部し、日々練習に励んでいる。試合や勉強で悩んだ時は大川小の被災校舎に足を運ぶ。「気持ちをリセッショントし、勇気をもってきて歸る場所だから」只野さんはためらひなく語る。

2011年3月11日午後3時半過ぎ。待機していた校舎から、やや高台にある陸橋のたもとに避難を始めた間もなく、北上川を越えたところから来る津波に襲われた。激しい波に押されて氣を失ったが、先に山の斜面に上がつた友達に引っ張られて助かった。「どれくらい気を失つたか分からない。偶然助かった」。近くにいたはずの小3年生だった未嫁さんや友達とは離れ離れになっていた。

「悔、超幸せたつたじや」と

只野さんは震災後、何度も被災校舎を訪れて校舎内の清掃活動もしてきた。周囲にあつた建物は撤去され、残るのはこの校舎だけ。津波の傷痕は今も痛々しく、つらに記憶も呼び起す。「でも、それより友達と過ごした思い出がはるかに上回る。ここでサッカーして、桜の花を見しながらおしゃべり、雪合戦して、俺、超幸せたつたじやんつて思う。生きて思い出すことができて、悩んでたら申し訳ないな、って思う」。自宅も含め、古里の風景が消えてしまつた只野さんによつて、校舎は唯一、思い出に戻れる場所もある。

震災直後から「亡くなつた友達のためにも知つておいた話を話したい」と誓ってきた只野さんは、震災にあつた出来事を周りの人々や報道機関の記者たちに語る中で芽生えたのが「友達が生きた顔を残すためにもあの校舎を残したい」という想いだった。2013年秋、東京で開かれた集会で只野さんが勇気を差すと、卒業生の先輩5人も「私たちも同じで施設として学校も『津波火災』を

じ」と声を上げて一緒に活動を開始した。15年3月には地元の集会や国連防災世界会議のフォーラムで、個々の思いを発信した。只野さんの発した言葉から校舎保存を望む声が地元にも広がり、大川小を「震災遺構」として保存するかどうかの検討が始まった。

ちゃんと生きてる

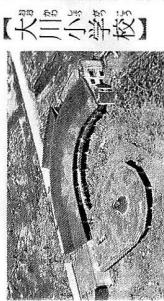
今年の2月13日、保存するかを判断するため、石巻市長が地区住民から直接意見を聞く会議が開かれた。委員の試合昭さん(44)にビデオメッセージを託した。会議には「近い将来起る災害で1人でも多くの命が救えるように、震災の記憶を風化させず語り継いでいくため絶対に必要になると感じます」と語る力強い言葉が流れた。「見るのはつらい」と解体を望む家族にも心を配つていて、「みんなが納得できるもうひとつ語り合って」との声で掛け合いで会場から震災の声が上がつた。

只野さんがこの5年を振り返る。「やっぱりもう元には戻らないんだなって実感して苦しくなる時もある。よく『あなたたは選ばれた人』とか言われるけど、偶然生き残つただけ。だからくなつた友達に尊々と『ちゃんと生きてる』って伝えられるようにしたい」。今の夢は「災害で人を直接助けられる消防士」。校舎を訪れるたび、その夢を胸に刻み直していく。



国連防災世界会議のフォーラムで被災校舎の保存を訴える只野さんら卒業生3名(左から佐々木千鶴、佐々木木帆)が2015年3月14日に石巻市で開催された国連防災世界会議にて具体的な実験で検討した。

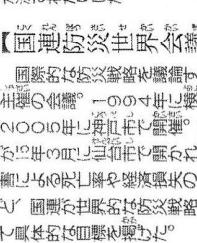
【震災遺構】 東日本大震災の教訓を後世に残すため、被災校舎がかかる形で保存された門校(2015年3月14日)も「津波火災」を



北上川の河口から約4キロにて校舎を越える津波に巻き込まれた頃、校舎全体が吹き飛ばされた。校舎は別の場所で倒れていた。震災後は現在はさらに別の小学校の敷地に移っている。



1月、津波車で震災遺構を添えて走行する。橋は河口から約4キロまで現れており、橋が流されただけだ。



2月、2015年に石巻市で開催された国連防災世界会議にて具体的な実験で検討した。

KEY WORDS

2011年4月17日、